

<総括>

試験時間	60分	総解答字数	600字
------	-----	-------	------

従来の合理的経済人の仮定を前提として構成された経済学の主流派の議論は、経済学の理論としてはあまり顧みられなくなり、むしろ人間の行動を必ずしも合理的とは見なさず、より多様な観点から人間行動を分析する経済学理論の方が脚光を浴びている。その結果、今日の経済学は行動科学というような領域へと傾斜している。慶大経済学部は過去、人間の行動の合理性について問う問題を実験経済学と呼ばれる領域から出題したことがあるが、本年の問題も同様に、具体的な状況の中で人間の行動の合理性について論じさせる問題が出題された。設問はAが要約説明問題で、課題文から該当箇所を抜粋することで解答を書ける。Bは具体的な状況の一つ仮想的に設定し、そこでの個人の行動について可能な解釈を3つ書かせ、それぞれについて合理性を説明させるというものである。しかし、設問の意図するところは必ずしも明確には理解されず、少なくとも受験生にとっては単純な作業を提示されたという感じの問題となっている。この作業は、そのすべてを完遂するには解答字数の点でいささか無理があるため、結局は単に課題文を読解し、限られた字数で何事かを説明する日本語の文章による説明能力が検査されるだけの問題となっているといえる。

ただし、テーマとしては、慶大経済学部が従来出題してきたものと乖離したわけではない。この大学学部は過去、知識や人間の理性について問い、さらに人間の行動の総計として社会的諸関係が生成されていくあり方を分析する問題をしばしば出題している。この問題も、人間の意図的行動と合理性ということ 키워ドにして、このテーマを追求するものであり、経済学部の出題として一貫している。

<課題文の分析>

大問番号	
内容 (主題)	人間の意図的行動を合理的なものとして解釈すること
出典 (作者)	リサ・ボルトロッチェ著、鴻浩介 訳、『非合理性』岩波書店、2019年
長短・難易等 前年比較	長短 (短い・やや短い・ 変化なし ・やや長い・長い) 難易 (易化・ やや易化 ・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
	課題文	学部系統的	A	説明	200字	課題文に基づき、「志向的スタンスでふるまいを予測すること」とはどういうことか、およびその予測に問題が生じるケースとはどのようなものか、説明する。
			B	論述	400字	あなたが電車に乗って席に座っており、隣にも人 (以下「甲」と呼ぶ) が座っているとす。駅に着き、ある人が甲の席の前に立つと、甲が席を立った。課題文に基づき、この甲の行動を志向的スタンスで説明できるような3つの異なる状況を設定し、各々の状況における「席を立つ」という甲の行動の「合理性」について400字以内で説明する。

※出題形式は「テーマ・課題文 (英文を含む場合は付記する)・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

＜答案作成上のポイント＞

まず課題文は、概念性が高く抽象的で、読みにくいが、趣旨はいたってシンプルである。「志向的状态」(intentional status) という難しい概念を使っているが、これは要するに「何らかの intention (意図・意思) をもつ」ということであり、課題文は人間という意図的行動を採る存在について、その行動の意図を解釈するとはどういうことかを説明しているだけである。さまざまな社会は、相互に他者の意図的行動を理解するための、ある共有された〈目的—手段〉連関の範型といったものを固有にもっている。たとえばある社会では、その社会における威信を高めるために、結婚式などで客に大盤振る舞いをするという〈目的—手段〉連関が範型として存在し、また他の社会では、二人だけで豪華な新婚旅行を楽しむために、結婚式ではなるべく金をかけずにお祝儀を集めるといった〈目的—手段〉連関が範型として存在する、といったことがある。いずれもある意図的行動が行われており、ある明確な目的の達成のために最善の手段が選択されていると解釈される限り、その行動は「合理的」である。

以上を理屈っぽく語っているのが、課題文の 2 頁目の部分で、そこで「志向的スタンス」について説明している部分のみ抜粋すれば、A の解答の半分になる。A は「予測に問題が生じるケース」についてもまとめることを求められているが、これは課題文の最後の方で、①「誤った知覚的信念」、②「行動が不整合で自己欺瞞的」という 2 つの場合が挙げられているので、それを説明すればよい。

B については、上に述べた〈目的—手段〉連関について、設問で挙げられたケースに関して想定しうるものを 3 つ挙げて、それが今日の社会において「合理的」(reasonable : rational)、すなわち一般に受け入れられる範型的なものであることを説明すればよい。つまり、電車の中で人が前に立ったとき、席を立つという行動を選択する理由 (reason) として、現代社会において自然であるもの=多くの人にとって認められるものであることを示せば、設問に言う「甲の行動の『合理性』」について説明したことになるだろう。3 つも説明することが要求されているので、うまい日本語で字数をかけずに説明しなければならない。説明とは、「理由を挙げて正当化する」(reasoning) ということでもある。

＜学習対策＞

従来の慶大経済学部が出題してきた小論文問題では、具体的な社会的状況に対して critical な意味をもつ概念が主題として採り上げられていた。すなわち問題性を孕み、現代の問題状況の分析に際してその概念の理解が重要な意義をもつような、そのような概念を、具体的な問題状況に即して考察することが求められていたのである。2022 年度入試の「集合知と多様性」、2021 年度入試の「支配的關係ではない非対称的な関係」、2020 年度入試の「社会サービス」といった諸概念はそのようなものであった。

本年度の問題も、人間の意図的行動や合理性という critical な問題概念について論じることが求められているが、この問題を解けるようになることを目標にして対策を積むというのは、必ずしも賢明ではない。問題の全体が抽象度が高く、その割に仕掛けがシンプルであるため、すでに述べたように、課題文の読解と、それを使った状況の解釈を、限られた字数で説明できれば、それなりに点が取れてしまう問題になっているからである。

まずは、他の年度の経済学部の出題問題について、その問題を分析し、どのような答案が可能で、どのような解答が出題者によって想定されているかを正確に理解していく必要があるだろう。ただ一回だけ解答を書いて、それで終わりにするというのではなく、答案を作成しては採点・添削を受けながら、慶大経済学部が問うていること、求めている思考の水準やあり方を理解していくのである。

その過程で、現代の経済社会において課題・問題となっている事柄に関心をもち、その解決のために必要なことは何かを考える態度を養うことが必要だろう。その際、必ず問題概念と呼ばれうるものが存在するのであり、それはしばしば多義性をもって現れ、具体的な問題状況に対し、その意味に関して「あれか、これか」という判断を迫るものとなっている。つまり論争的なのである。こうした概念を操作し、問題を分析し、論争をシミュレーションできる能力を涵養することが求められる。